

# 理工学メディアセンターにおける新しいコミュニケーション場創生の試み—Sサークル—

しいき かずお  
椎木 一夫

(慶應義塾大学名誉教授)

## ・学生に対するピアサポートの必要性

S-Circle(以下Sサークル)は「理工学部における、学生の学生による学生のための相談」を活動の中心とした組織である。Sは、Science & Technology(理工学)のSであり、Student(学生)、Soudan(相談)のSでもある。Sサークルは慶應義塾創立150年記念未来先導基金から3年間の助成を受けて2010年度に発足し、現在はメディアセンターの経費で運営されている。

最近の理工学部生は皆高いポテンシャルを持っていることは間違いない。しかし、一方で競争社会を反映して、自分を見失って孤独感を持ち、活力に乏しい学生が増えている。そういう学生の中には、ちょっとした困難に出会うと、不登校になったり、留年したりする者もいる。

入学形態の多様化によって様々な学習内容・レベルの学生が混在し、高度な専門教育の入り口でつまづく学生がいる。

4年生になって配属された研究室の人間関係に悩んだ結果、大学には来るものの研究室に顔を出せなくなる学生もいる。

こういった問題を持つ学生の大部分は、初期段階において適切な支援やコミュニケーションがあれば、問題を回避して本来のポテンシャルを発揮できるのではないかと考えられる。

2007年にメディアセンターは学生の学習実態を把握し、図書館における学習支援に対するニーズを明らかにすることを目的に、フォーカスグループインタビューを実施した。その結果、学生たちが学習上の悩みをどのように解決しているかが明らかになった。

学部生がわからないことを聞く相談相手は、「自分が知っている人」、「聞きたい内容について答えられる人」、つまり教員や同じ授業に出ている学生である。教員は、最も聞きたい対象である。しかし「忙しそうで聞きづらい」「初歩的なことで今さら聞けな

い」といった印象を持っていることが分かった。ある程度理解ができていなければ、先生には質問できないのである。

さらに、学習以外の悩みは教員には相談しにくい。学習指導や学生相談室は敷居が高い。しかし、なんでも相談できる友達がいるとは限らない。ちょっとしたことにつまづいている学生に対して、学生が支援するピアサポートの仕組みが必要と考えられた。

一方、図書館に対しては、授業時間以外のやすらぎの居場所であるとともに、資料が揃っていて何でも問題を解決できる場所としての要求が根強くあることも分かった。

そこで、理工学メディアセンター内に新たな「コミュニケーションの場」を設け、友達と教員の間に位置する学生スタッフとして大学院生や学部4年生に積極的に関与してもらい、学生の孤独感を和らげ、つまづきを解消することを試みたわけである。



コンサルテーションスペースにおける学生スタッフによる相談

## ・Sサークルへの期待

学生スタッフは、教員やカウンセラーなど専門家としての対応はできない。そこで学生スタッフには、おにいさん、おねえさんの立場で一緒に考えて、相談に来た学生本人が考えるお手伝いを期待している。

## 〈特集〉教員・学生との結び付き：メディアセンターの新たな取り組み

学生スタッフは教員ではないから、突然質問される学業の内容に全て正確に答えられるとは限らない。即座に答えられない場合は、スタッフの宿題としてもよいのである。

また学生スタッフには、学生相談室のカウンセラーの方々からカウンセリングマインドについて予めレクチャーして頂いている。しかし、それだけでカウンセリングできるわけがない。話を聞いてスタッフが必要と感じれば、学習指導の先生や学生相談室など適当な部署に繋げばよい。

さて福翁自伝を読むと、福澤諭吉先生が学んだ適塾や先生が始めた蘭学塾では、教える者と学ぶ者の分を定めず、それぞれの分野で一日の長のある者が教える、相互に教え合い学び合う仕組みであったことが分かる。すなわち「半学半教」の教育形態であった。

これは大勢の塾生を指導するためにやむを得ないやり方であったのかもしれないが、教える側も教えられる側も学問に対する理解をより深めるのに役に立った。その伝統もあって慶應義塾では、教員と学生の別なく、先輩と後輩の別なく、率直に学び合い、自由闊達に意見を述べ合う気風が尊重されている。Sサークルは、その実践の場とも言える。

現在のところ、Sサークルの活動の中心は履修申告、大学院入試、勉強内容、学科分け、研究室分けなどに関する相談や、恋愛や矢上キャンパスでの過ごし方などについての話し相手を中心である。理工学部の学生の多くは大学院に進学していることもあり、先に述べたように、これらの先輩をスタッフとして、つまづきを援助する自主的活動組織を作り運営し、学習や研究の困難な場面の解決や、悩み相談など学生生活のサポートを行っている。

しかし困って悩んでいる学生ばかりでなく、学生スタッフにとっても、Sサークルのメリットが考えられる。自主的活動を促進することによって、コミュニケーション力、広い視野、行動力が養われるに違いない。

さらに留学生にスタッフとして積極的に参加してもらえれば、互いの視野を広げることができるであろう。英語論文の添削指導やプレゼンテーションの指導なども可能かもしれない。

つまり、Sサークルの活動を促進すれば、学生スタッフと相談に来る学生の双方に対して

- 1) コミュニケーションの活性化による自己理解の深化・人間的成長
  - 2) 学習支援による基礎学力の向上
  - 3) 英語論文執筆支援やプレゼンテーションの援助による学会活動の質向上
  - 4) 母国語以外の言語に対する不安解消と国際交流活性化
- などの効果が期待できる。

またSサークルでは、さらなる知の交流を目指して活動を広げている。たとえば、学生スタッフによる選書、教員にお願いしてご自身の最先端の研究を分かりやすく話して頂くサイエンスカフェの開催、留学生との交流イベントの実施などである。いろいろな立場の教員・学生が、お互いに教えあい、学び合う異文化交流によって新たな展開が起ることを期待している。



学生スタッフによる選書活動・ポップ展示



ロビーでコーヒーを飲みながら6限目のサイエンスカフェ

### ・図書館からメディアセンターへ

理工学メディアセンター所長在職時に、何人かの教職員の方から「Sサークルの活動は理解できるが、メディアセンターでやるべきこととは思えない」と

いうご意見を頂いた。縦割り組織の中で、新しいことをやろうとすれば、必ずこういう問題にぶつかる。たしかにSサークルは従来の図書館の枠組みには入らないかもしれない。しかし、私はSサークルが図書館の一つの将来方向を示していると考えている。

大学は学問の場である。学問とは、「学び問う」ことである。ただ「学ぶ」だけであれば知識はインターネットにあふれており、学生は必ずしも大学に来る必要はない。今の世の中では、家にいてもインターネットで世界的に著名な教授の講義を受けることができるのである。

わざわざ大学に入学して学問する意味は、「問い」にある。これはインターネットではすまない、人と人との間に生まれる双方向のコミュニケーションとも言える。自分が疑問に思うことを人につけることが進歩の始まりである。「問い」の立て方によって、答えを求める方向が変わり、新しい展開、イノベーションが起こる可能性が生まれる。

これからの大学図書館は積極的に「問い」を支援していかなければならないと思う。これまで大学図書館は、静かに一人で集中して「学ぶ」場を構築してきた。さらに自宅や研究室から、24時間いつでも欲しい情報が参照できる仕組みを作ってきた。もちろん図書館はそういうインフラを引き続き整備していく必要がある。しかし、いつまでも「本を貯蔵する場・読む場」に満足しているわけにはいかない。知の倉庫としての、図書館という建物の意味は薄れつつある。

そこで、理工学メディアセンターではグループ学習の場を充実させてきた。今後はさらに一歩進んで新しいコミュニケーションの場を作る努力が必要であろう。図書館は知的交流の媒体「真のメディアセンター」としての役割を持たなければならない。

Sサークルが単なる相談にとどまらず、人と人とのコミュニケーションを生む場となり、新しい知が蓄積され、それが活用される場に成長することを祈りたい。